

2017 年度 慶應義塾大学体育研究所 基盤研究シンポジウム

**「オリンピック教育とスポーツボランティア
～東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」**

報告書

慶應義塾大学体育研究所

慶應義塾大学体育研究所・(公社) 全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム
「オリンピック教育とスポーツボランティア

～東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」

シンポジウム記録

発刊に寄せて

体育研究所基盤研究
第3班 班長 村山光義

シンポジウム開催の経緯とビジョン

本シンポジウム記録は、2017年12月2日に「オリンピック教育とスポーツボランティア～東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」として開催された内容をまとめたものです。これは、体育研究所の共同研究プロジェクトである基盤研究の中で、コアテーマ③「大学体育の教育理念とカリキュラム:大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」として活動している第3班が企画したものです。プロジェクト全体の成果記録は数年の単位でまとめられ、2017年度の成果は中間報告として簡易型の研究レポートが発刊されていますが、シンポジウムの詳細を迅速に報告するため、ここに別途記録冊子として発刊の運びとなりました。

本研究班のねらいは、現在、様々に語られている大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討することです。これまで文献レビューによって体育・スポーツの現在の課題を探るとともに、(公社) 全国大学体育連合関東支部と連携し大学体育の今後を見据えたシンポジウムを行ってきました。過去のシンポジウムは2014年、2016年に大学生の育成をテーマとし、

「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」

「大学生をどう育てるか その2 ―リーダーシップ・プログラムを手がかりに―」

というタイトルで開催しました。今回これに引き続くものとして、東京 2020 オリンピック・パラリンピックを控えた時期に大学生の育成に体育がどう関われるのかという視点を加えました。その第1弾として「オリンピック・パラリンピック教育」と「ボランティア」という基本的な課題を取り上げ、さらに2020年にむけた慶應義塾の塾生によるサポートプロジェクトチームの育成活動の実際を加え、教員と学生がともに考え議論できるシンポジウムを企画しました。

シンポジウムの内容は以下を参照願いたいと思いますが、議論はまだその緒についたばかりという状況です。2020年東京大会が大学教育においてどのような機会となるのか、そしてその先にどう活かされるのか、そこから大学生をどう育てることができるのか、今後第2弾・3弾とより具体的な内容について議論を続けていきたいと考えます。是非ご覧いただき、忌憚らないご意見を頂戴できれば幸いです。

慶應義塾大学体育研究所基盤研究シンポジウム 「オリンピック教育とスポーツボランティア ～東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」 報告書

発刊に寄せて

体育研究所基盤研究第3班 班長 村山光義 1

シンポジウムの趣旨およびレジュメ.....3

【シンポジウム記録】

オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開
～東京 2020 に向けて、そしてそれから～6
宮崎明世（筑波大学）

スポーツボランティア教育の展望..... 12
二宮雅也（文教大学）

KEIO スポーツレガシー
～東京 2020 オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた
人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】～ 16
稲見崇孝（慶應義塾大学体育研究所）

全体討論..... 20
ディスカッサント：竹市勝（国士舘大学・（公社）全国大学体育連合関東支部長）

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

「オリンピック教育とスポーツボランティア ～東京2020に向けた大学・教員・学生の関わり～」

シンポジウム記録

シンポジウムの趣旨およびレジュメ (パンフレット掲載内容より)

【趣旨】

慶應義塾大学体育研究所では、プロジェクト研究・基盤研究の1テーマ「大学体育の教育理念とカリキュラムを考える」の検討として、(公社)全国大学体育連合関東支部と連携し、2014年に「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」、2016年に「大学生をどう育てるか その2 リーダーシップ・プログラムを手がかりに」と題し、二度のシンポジウムを開いた。それぞれのシンポジウムにおいて、体育教育が大学生の社会的育成に総合的に寄与できること、また体育の中にはリーダーシップやライフスキル獲得といったものが集約されていることが示され、大学生を育てる上でのヒントを見出しできた。

今回のシンポジウムでは、東京2020を約3年後に控え様々なムーブメントが起きている今、東京大会が大学教育においてどのような機会となるのか、大会に向けて、大学、教員、学生がどのように関わり、関わり合えるのか、オリンピック教育とボランティアの観点から、総論的に議論をしたい。

東京2020はオリンピズムやオリンピックの価値を身近に感じることができる絶好の機会となる。特に、この大会では「全員が自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」の3つを基本コンセプトとしているが、身近な大会である東京大会に向けて、オリンピック教育分野の観点から、大学・教員・学生それぞれの立場においてどのような機会となり、学びになるのか、これらを専門としている筑波大学の宮崎明世氏に、解説も含めご教示いただく。

次に、スポーツを「する」「観る」に加えて「支える」

という動きが現在活発化しているが、スポーツを支える活動、つまり「スポーツボランティア」の実際について理解を深めたい。ここでは、スポーツボランティアを専門としている文教大学の二宮雅也氏にスポーツボランティアの実際や魅力、課題についてご教示いただく。

また、慶應義塾大学では東京2020の事前キャンプ地として英国チームを受け入れることが決まっており、それに向けた学生ボランティア組織を立ち上げ、活動を開始している。そこで、慶應義塾大学体育研究所の稲見崇孝氏には、学生ボランティア組織の現状と今後の方針について、実践例をご紹介いただく。

以上の3名の話を受けて、ディスカッサントである竹市勝氏から発言をいただき、フロアを交えて議論を行

オリンピック教育とスポーツボランティア ～東京2020に向けた大学・教員・学生の関わり～

慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

期日: 2017年12月2日(土) 15:00～16:30
会場: 慶應義塾大学日吉キャンパス 第4校舎8棟 12番教室
対象: オリンピック教育、スポーツボランティアに関心のある
大学関係者(教員・職員・学生)

※参加費無料
※事前申し込み不要

シンポジストならびにテーマ

- オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開
～東京2020に向けて、そしてそれから～
宮崎 明世(筑波大学)
- スポーツボランティア教育の展望
二宮 雅也(文教大学)
- KEIOスポーツレガシー
～東京2020オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を
備えた人間育成プロジェクト [KEIO 2020 project] ～
稲見 崇孝(慶應義塾大学体育研究所)
- ディスカッサント
竹市 勝(国士館大学・(公社)全国大学体育連合関東支部長)
- コーディネーター
福士 徳文(慶應義塾大学体育研究所)

問い合わせ先

慶應義塾大学体育研究所
〒223-8521
横浜市港北区日吉4-1-1
TEL: 045-566-1068
E-mail: fukushi@keio.jp
(担当: 福士)
URL: http://ipe.ho.keio.ac.jp

Keio University 公益社団法人 全国大学体育連合

図1 シンポジウムチラシ

うことで、オリンピック教育を理解するとともに、ボランティアの現状を知り、東京 2020 を契機とした学生の育成や学び、また大学・教員・学生の関わり合いについて重要な要素を導き出したいと考える。

コーディネーター：福士 徳文
(慶應義塾大学体育研究所)

【シンポジストならびにテーマ】

オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開～東京 2020 に向けて、そしてそれから～

宮崎 明世 (筑波大学)

【要旨】

2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、オリンピック・パラリンピック教育の全国展開が進められている。開催都市である東京都は独自に教育を展開しているが、全国的には温度差があり、全国を巻き込んだ気運の醸成には至っていない。オリンピック・パラリンピック教育は、大会開催の前後に限って行われるものではなく、恒久的にとらえることのできる価値教育としての側面がある。大会開催後も残るレガシーとして、どのように教育を展開していくべきか、現在進められている全国での取り組みの事例を紹介しながら検討する。

【略歴】

宮崎明世 (みやざき・あきよ) 筑波大学体育系准教授、東京都立高校、筑波大学附属高等学校教諭を経て、現職。専門は体育科教育学で、おもな研究テーマは、発達段階に応じた基礎的運動の指導、およびオリンピック・パラリンピック教育。筑波大学オリンピック教育プラットフォーム (CORE) の一員として、オリンピック・パラリンピック教育の全国展開に携わっている。

スポーツボランティア教育の展望

二宮 雅也 (文教大学)

【要旨】

東京 2020 大会を前に、各教育機関においてボランティア教育が盛んになってきている。特に、高等教育の観点に立つならば、全国の大学生がボランティアとしてオリンピック・パラリンピックへ積極的に関わるための必

要な知識などを大学の授業等を通じて教育することは、人材育成の面からしても必要なことである。また、「ダイバーシティ & インクルージョン」の観点からも、ボランティア教育は汎用性が高い。特に、外国人や高齢者、障がいのある方もボランティアに参加することを前提とするならば、ボランティア同士の多様性理解と、サービス提供者への多様性理解の促進等が期待される。ここでは、ボランティアの本質に迫りながら、大学におけるスポーツボランティア教育の実際を紹介するとともに、その展望と課題について整理したい。

【略歴】

二宮雅也 (にのみや・まさや) 文教大学人間科学部人間科学科准教授。筑波大学大学院体育研究科修了。民間シンクタンク研究員、上智大学嘱託講師等を経て、2010 年より現職。日本財団ボランティアサポートセンター参与。日本スポーツボランティアネットワーク理事、日本スポーツボランティア・アソシエーション理事。スポーツ庁オリンピック・パラリンピック教育に関する有識会議元委員。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ボランティアアドバイザー会議メンバー。専門領域は、スポーツ社会学、健康社会学、地域活性論。主な著書に『スポーツボランティア読本―「支えるスポーツ」の魅力とは?―』(単著、悠光堂)『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』(共著、ナカニシヤ出版)、『身体と教養―身体と向き合うアクティブ・ラーニングの探求―』(共著、ナカニシヤ出版) など。

KEIO スポーツレガシー

～東京 2020 オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】～

稲見 崇孝 (慶應義塾大学体育研究所)

【要旨】

慶應義塾大学日吉キャンパスは、横浜市・川崎市とともに 2020 年東京オリンピックに参加するイギリスオリンピックチーム (British Olympic Association : BOA) の事前キャンプ地となっている。現在、慶應義塾大学は BOA のサポート役として、主として塾内学生を対象としたスポーツボランティアチーム (KEIO 2020 project) を組織しており、塾生へのオリンピック・パラリンピック教育、スポーツボランティア教育をスタートしている。

本シンポジウムでは、本プロジェクトを通じて塾生が構築する無形のレガシー確立（KEIO スポーツレガシー）までの段階的な取り組みとともに、事前キャンプ受入までの間に備えたい“生きる力”の獲得を目指した包括的な取り組みについても紹介する。

【略歴】

稲見崇孝（いなみ・たかゆき） 2011年9月中京大学大学院体育学研究科博士後期課程健康科学系修了。博士（体育学）、中学・高校保健体育専修免許。1981年6月岐阜県岐阜市生まれ。2004年4月から愛知医科大学医学部附属運動療育センター（愛知県長久手市）に赴任し、10年間整形外科やリハビリテーション医学を学ぶ。バスケットボールやサッカー、バレーボールなどトップアスリートのメディカルサポート業務に従事。2013年8月からは Edith Cowan University (Australia) に visiting research fellow (visiting scholar program) として在籍。2014

年9月から早稲田大学スポーツ科学学術院に次席研究員（研究院助教）として勤務。2017年4月から現職。

ディスカッサント

竹市 勝（国士舘大学・（公社）全国大学体育連合関東支部長）

【略歴】

竹市勝（たけいち・まさる） 国士舘大学政経学部教授。筑波大学体育専門学群卒業後、同大学大学院体育研究科修了・体育学修士、東京農工大学大学院博士課程修了・博士（工学）。これまで東京YMCA社会体育専門学校、財団法人日本レジャースポーツ振興協会を経て、国士舘大学に勤務。現在、（公社）全国大学体育連合関東支部長、調査研究部副部長。一般社団法人日本超音波骨軟組織学会副会長を務めている。

【シンポジウム記録】

福士：それでは定刻となりましたので、シンポジウムを開始したいと思います。私、慶應義塾大学体育研究所の福士と申します。本日はよろしくお願いいたします。本日は、慶應義塾大学体育研究所と公益社団法人全国大学体育連合関東支部の共催といたしまして、「オリンピック教育とスポーツボランティア～東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」ということでシンポジウムを開催いたします。

本日は3名のシンポジストの方と指定発言者の方を加えて、最終的にフロアのみなさんと一緒に東京オリンピックを契機とした学生の学びであったりとか、あとは大学、教員、学生がどうやって関わり合っているのか、そういった所の課題などについて、オリンピック教育とボランティアの観点から幅広く議論が出来ればと思っています。

シンポジウムの趣旨に関しましてはお手元に資料を配布しておりますが、我々体育研究所では大学体育のあり方について、主に文献のレビューを行いながら、必要なテーマを取り上げるということで検討を進めています。その中で、2014年と昨年に「大学生をどう育てるか」というテーマで二度シンポジウムを行って参りました。また、そういった中で東京オリンピックが決まり、慶應義塾大学ではイギリスオリンピックチームの事前キャンプ地として受け入れることが決まりまして、これらの流れの中で今回はこのオリンピック教育とボランティアというところをテーマにシンポジウムを開催するという運びになりました。

本日は3名の方にお話を頂いたあとに、指定発言者である竹市先生にご意見を頂きながら、フロアで議論を進めていって、最終的にオリンピック教育やボランティアについての課題などを発見して、教育に繋げていければと思っています。

それでは、早速ですが、一番目に筑波大学の宮崎先生にお話を頂きたいと思います。先生方のご紹介は同じくパンフレットの方にも記載しておりますが、そこも確認して頂きながら是非お話を聞いて頂ければと思います。それでは、宮崎先生よろしくお願いいたします。

オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開

～東京 2020 に向けて、そしてそれから～

宮崎明世（筑波大学）：みなさんこんにちは。筑波大学体育系の宮崎明世と申します。本日はよろしくお願いいたします。私の方からは、「オリンピック・パラリンピック教育と日本における展開」ということで、副題として「～東京 2020 に向けて、そしてそれから～」、オリンピック・パラリンピック開催以降はおそらくかなりトーンダウンするだろうと思われるのですが、教育としてはそれでは困るという立場もありますのでこのようなタイトルをつけさせていただきました。

話を進めさせていただきます。まず、私は今筑波大学体育系に所属していますけれども、専門は体育科教育学です。元々は高校で体育の教員をしておりまして、現在は筑波大学にいますけれども、そもそももっと違う研究をしていました。筑波大学オリンピック教育プラットフォームという組織を2010年に立ち上げまして、その時に現場で学校の中で教育を行っていくために関わるようになりました。2013年、2020年東京が決まった時よりもっと前にこの組織は立ち上がっております。筑波大学は附属学校を11持っておりまして、そちらと関連しまして進めていくということで、そういう立場からオリンピック・パラリンピック教育というものに関わるようになりました。そもそもここでどのようなお話をするべきかというものあるのですが、ご参加のみなさま



宮崎明世氏

オリンピック教育とは

「平和な社会の構築に尽くす調和的全人の育成」というオリンピック憲章の理念（オリンピズム）実現に向けて展開される教育活動

1970年代からオリンピック教育の意味や教育プログラムが示されるようになった。

オリンピズムと教育の一般的な目標との共通性（Bruce, 1985）

・多人数の参加 ・教育としてのスポーツ ・スポーツマンシップ ・文化交流 ・国際理解 ・卓越性

オリンピック教育の特徴（Mueller, 2004）

・調和のとれた全人教育 ・スポーツ活動の機会均等やフェアプレイのような道徳的原理との関連 ・卓越性の追求 ・国家間の寛容と尊敬による国際平和 ・スポーツの中の、スポーツを通じた解放に向かう動き

「オリンピック教育」という知識体系を各国のテキストの中に見出すことは困難

→ スポーツ教育学の1分野として、または体育授業のテーマとしてオリンピック教育が含まれるという考え方は広く世界に受け入れられている（Naul, 2008）

図 2

方の、オリンピック教育に関する知識や、学生さんたちもいらっしゃいますのでどの程度ご存知か分からないので、非常に根本的な話からさとお話ししたいと思います。

オリンピック教育はそもそも学校の中だけではありません。ご存知のとおり社会一般の方、もちろん選手教育、メディア等、色んな意味で教育の対象はあると思うのですけれども、先ほども言いましたように私の話は学校が中心になります。学校教育中心ですので、そもそも学校の中でそれを入れていくということになったときに、オリンピック教育ってなんだろうという話が最初に来るわけですね。そこを明確にしないと何をやっていいのか分からないということがまず出てきた訳です。それを調べていきますと実はあまり明確な定義がないというのが事実だと思います。ただどじゃあどうということかというのと、「平和な社会の構築に尽くす調和的全人の育成」というですね、「オリンピック憲章の理念」（オリンピズム）と言いますけれども、その実現に向けて展開される教育活動のことをオリンピック教育と相対的には言います。これ、中身が何か分かりますか？ 分からないですよね、なんだそれはってということになる訳です。

1970年代位からオリンピック教育の定義がどんなものかとか、どんなことをやるのかとか、コンテンツの整備とか、そういうことが盛んになったという風に言われています。この様々な研究者のものを見ますと、オリンピズムという精神、それと教育の一般的な目標というのは共通性があるのではないかなというようなことです。「広く行われるもの」とであるとか、スポーツを教育として「教育としてのスポーツ」と捉えていることとか、それとスポーツの中で培われる「スポーツマンシップ」ですね。それからスポーツだけではなく「文化、国際交流」などが対象になるとか。そして「卓越性」というのは、エク

オリンピズムの根本原則

Fundamental Principles of Olympism (オリンピック憲章)

1. オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を追求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的責任、さらに普遍的で根本的な価値規範の尊重を基盤とする。

2. オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人間の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである。

3. オリンピック・ムーブメントは、オリンピズムの価値に鼓舞された個人と団体による、協調の取れた組織的、普遍的、恒久的活動である。その活動を推進するのは最高機関のIOCである。

活動は5大陸にまたがり、偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会に世界中の選手を集めるとき、頂点に達する。そのシンボルは5つの結び合う輪である。

4. スポーツをすることは人間の1つである。すべての個人はいかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。

6. このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国籍あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。

<http://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2016.pdf>

図 3

セレンス、競技だけではないのですけれども、より良くということを求めていく、そういうあたりが共通性ではないかという研究者がいたり、ドイツの Mueller という人は、オリンピック教育の特徴として、「調和のとれた全人教育」であるとしています。オリンピックというのはスポーツイベントなので、学校の中に入ってくると体育の先生が中心になりがちですけれども、スポーツだけではないですよということです。これが人間教育ということです。しかし、スポーツイベントでもあるので、「スポーツ系活動の機会均等やその中で身につくフェアプレイのような道徳的な原理」であるともいえます。そういったものを関連させて見つけて行くということです。そして、「卓越性の追求」ですとか「国家間の寛容と尊敬による国際平和」、「スポーツの中のスポーツを通じた解放に向かう動き」、など、前に紹介したものと割と似ていることですね。そして、ドイツの研究者の Naul によれば、オリンピック教育という知識体系、それ自体を見つけようとすると、実はあまり位置付けられていないけれどもスポーツ教育学の一分野あるいは体育授業のテーマとしてオリンピック教育が含まれるという考え方は割と広く通用するとしています。それでもあまりはつきりしないのですけれども。

そもそもオリンピズムとは何かという話ですが、オリンピズムの説明としまして、オリンピック憲章の根本原則があります。ここに挙げられている7つの1番、2番、4番あたりがそこに当たるだろうという風に言われています。それはどんなものかということ、オリンピズムは肉体と精神、意志と精神の全ての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学であると。つまり、体だけではないよということですね。精神とか意志とかそういうことも全て含む。そして、文化、教育とスポーツを融合させることですね。その中に生き方の創造を追求するも

オリンピックの価値と教育的テーマ（IOC）、パラリンピックの価値（IPC）

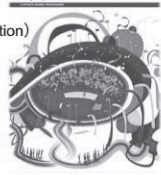
Olympic Values

卓越（Excellence）
尊敬（Respect）
友情（Friendship）

Paralympic Values

勇気（Courage）
強い意志（Determination）
インスピレーション（Inspiration）
公平（Equality）

The Fundamentals of Olympic Values Education



5 Educational Themes

- 努力の喜び（Joy of effort）
- フェアプレイ（Fair play）
- 他者への尊敬（Practicing respect）
- 卓越性の追求（Pursuit of excellence）
- 身体・意志・知性の調和（Balance between body, will and mind）

図 4

のであるとか、その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とするということのようなことが第一に書いてあります。例えば、4番目にスポーツをすることは人権の1つであること、そして、友情とか連帯とかフェアプレーの精神だということが書かれているのです。3番と6番を今回残しましたのはなぜかというと、先ほども言いましたように、オリンピックがあるから、近づいているからやるというものではなく、実はその理念というのは恒久的に行われる価値教育だと思われまます。それは3番に書いてあります。6番目はいかなる種類の差別を受けることなくということが示されていて、おそらく時代は変わっていきますので、1896年の時はクーベルタンという人は女性がオリンピックに参加することなど全く考えていなかったのですけれども、今時代が変わってきて種目を同数にすることまで検討されていますよね。このあと出てくるパラリンピックの位置付けというものが、おそらく最後の6番、いかなる差別も受けないこととか平等とかそういうところに理念としては入ってくると思われます。こういったことを、根本としています。

ここに示された内容が非常に分かりにくいということで、近年ではこのような形で3つのOlympic Values、つまりエクセレンス（卓越）、リスペクト（尊敬）、フレンドシップ（友情）として示されています。これをもう少し具体的な教育的価値として、努力する喜び、フェアプレイ、他者への尊敬、卓越性の追求、そして身体・意志・知性の調和にまとめられています。これで少しスッキリしているかなと思います。

しかしここにはパラリンピックが出てこない訳ですが、そもそもこの2つは全く別の大会です。タイトルはオリンピック・パラリンピック教育という風になってい

これまでのオリンピック教育

1964年東京：戦後の復興を世界にアピールする大会、第2回パラリンピック開催
公衆マナーの向上と国際理解教育が中心。

1972年札幌：英語教育と国際理解教育が行われた。

1998年長野：一校一国運動（国際交流プログラム）、環境教育

1998以後の世界の国際交流活動

年	開催地	活動内容
2000	シドニー	Network of Friendship Program：ニューサウスウェールズの小学校300校が外国の小学校と文化交流 Olympic Welcome Program：各国について事前学習し、オリンピック選手を選手村で迎え、交流する文化活動
2002	ソルトレイクシティ	One School, One Country：ユタ州の小学校が参加各国と文化・言語・習慣・音楽・スポーツなどで交流
2006	トリノ	Black Ring：ピエモンテ州の高校が参加各国の学校と交流。言語学習、手紙の交換、訪問の受け入れなど
2008	北京	Heart to Heart Partnership Program：210の中小学校が参加して、各国のオリンピック委員会、パラリンピック委員会と交流
2014	ソチ	One School One Country：2012年から開始。67の学校が53か国と交流、相手国の言語、文化、歴史について学び、訪問の受け入れなどで交流

図 5

たと思いますが、このタイトルはオリンピック教育となっていますよね。今文部科学省が動かしている、このあと話す事業などで全国に教育を広げていく時に、名前は「オリンピック・パラリンピック教育」というように、パラリンピックを名称として並べて示すことを文部科学省が決定しました。それはパラリンピックを表に出すことによって人々の関心を高めるということが狙いだと聞いています。本来これらの活動を始める時に、オリンピック教育の中に含まれると思っていたのですけれども、そもそもパラリンピックを主宰するIPCなどは未整備な部分も多いです。様々な問題を含んでいると思います。ですので、このParalympic ValuesというのはそもそもOlympic Valuesと並べて論じていいものかどうかちょっと分からないんですけれども、こういうやり方で進められていて、2012年ロンドンの前あたりからこの3つの価値、4つの価値というのを並べて7つの価値に基づく教育を展開するように最近はなっています。その本質的な部分は、実は調べていくと色々問題はありますが、一応今はこういう形で示されています。

これまでのオリンピック教育については、実はとくに新しいことではなく、1964年東京の時に実は組織的にオリンピック教育が行われたと言われております。1964年の大会は、日本の戦後復興を国際的にアピールする大会でありました。1972年札幌や1998年長野の開催時も日本ではオリンピック教育が行われていて、それぞれ目的がありました。その中でも、長野の「一校一国運動」というのは非常に有名といいますか、後々残るようなものになって、そのあと世界でも色々な形で行われています。今度平昌がありますけれども、だいぶ遅れていて規模も小さいと思うんですけれども、ある程度やられるようです。日本の担当は平昌高校だそうですよ。

そして世界のオリンピック教育に目を向けると、カナ

世界のオリンピック教育の実例

大会が行われる都市を中心にオリンピック教育が行われ、近年ではインターネットを活用した教育プログラムが作られることが多くなった。

- ◆2012 ロンドン：組織委員会公式教育プログラム「Get Set」
- ◆2016 リオ・デ・ジャネイロ：教育プログラム「Transforma」
- ◆カナダ：Canadian Olympic School Program (COSP) 1987年～
- ◆オーストラリア：Australian Olympic Education
- ◆ドイツ：大会ごとに生徒向けの教育読本を発行。2014ソチからはweb上で公開



図 6

ダやオーストラリア、こういったところはオリンピックの開催を機に web 上で色々なプログラムを展開されていて非常に充実したものがあります。カナダなどは、特に冬季大会の開催経験が多く、研究も盛んです。近年、そのオリンピック教育プログラムとして有名なのは2012年ロンドン大会の公式教育プログラムであった「Get Set」です。そして昨年行われました2016年リオ大会では、「Transforma」というプログラムがやはり web 上で展開されたのですが、これはもう全く違うものです。「Get Set」はかなりお金をかけて業者に委託して作成されました。ネット上で登録すると、サイト内に入れて、色んなイベントの情報や学校で使える教材が中に整備されていました。「Transforma」というのは、お金をかけてやったものではないらしく、要するに中心となった研究者や10人に満たない色々な方々が作られたと聞いております。今はもうサイトは閉じられてしまっていますが、「Get Set」はイギリスのオリンピック委員会が引き継いで今も運営されています。

それでは日本ではどうするかというと、日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の主な推進主体としては、もちろん組織委員会、そしてスポーツ庁ですね。そして、みなさんご存知だと思いますけれども、オリンピックは都市で開催するものであって日本、国で開催するものではないのです。したがって東京都が開催都市であり、東京都は教育委員会が中心になってかなり独自に教育の取り組みを進めています。そしてもちろん JOC、JPC、そして日本財団パラリンピックサポートセンター、そしてスポンサーなど。内閣府もあるのですが、そういったところが中心となって教育が進んでいます。オリンピック教育とは何かという結論が出ないままにこんな時間が経っていますけれども、具体的には、オリンピックそのものについての学びというのと、オリンピックを通し

オリンピック教育の意義と具体的内容

1 スポーツの価値とオリンピック・パラリンピック教育の意義

- (1) スポーツの価値
・スポーツは、精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらす、人々が生涯にわたって心身ともに健康で文化的な生活を営む基盤。スポーツには、自己充実・自己変革を促す力、社会や世界を変える大きな力がある。
- (2) オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義
・オリパラ教育の推進には、オリンピックの3つの価値(卓越Excellence、友情Friendship、敬意/尊重Respect)とパラリンピックの4つの価値(勇気Courage、決意Determination、平等Equality、インスピレーションInspiration)が必要。
・オリパラ教育は、スポーツの価値の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に活躍できる人材を育成するもの。
- (3) オリンピック・パラリンピック教育の具体的な内容
・オリンピック・パラリンピックそのものについての学び(大会に関する知識、選手の体験・エピソード等)
・オリンピック・パラリンピックを通じた学び(スポーツの価値、参加国・地域の文化等、共生社会、持続可能な社会等)

文部科学省（スポーツ庁）オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議
(平成27年2月～平成28年7月、全9回)

図 7

2 オリンピック・パラリンピック教育の推進体制と全国的なオリンピック・パラリンピックムーブメントの推進

- 【東京都の取組】
・2016年度より、都内全ての公立学校でオリパラ教育のプログラムを推進。各学校において年間指導計画を所定し、年35時間程度を目安に実施。
・「オリンピック・パラリンピック学習読本」を全校配布。教員向けの指導書等を作成・配布。教員研修の拡充、専用ウェブサイトの構築を予定。
- 【組織委員会の取組】
・教育プログラム(愛称「ようい、ドン!」)を展開。
・リオ大会後から、東京2020大会ビジョン等に基づいた取組を推進する制度をスタート。認証を受けたオリパラ教育実施校には大会エンブレムの入ったマークを付与。併せて、スポンサー企業、大学等、地方の非営利団体による教育プログラムを推進。
- 【政府による全国的な推進体制の構築に向けた取組】
・リオ大会が終了し、東京大会に向けた本格的な全国的な展開が求められる2017年度以降は、東京都以外の46道府県においても実践的なオリパラ教育が実施されることが必要。
・国・教育・スポーツ関係団体、企業、NPO等が連携し、オリパラ教育の全国展開を推進することが重要。
・スポーツ庁が、東京都(先行的な取組)及び組織委員会(認証制度)と十分に連携を図りながら、各地の教育委員会のインディエナプに基づき取組を財政面も含めて支援する体制を整備することが必要。
- スポーツ実施率向上への取組、総合型地域スポーツクラブやスポーツ少年団の活動、地方公共団体によるホストタウンの取組、被災地復興への支援、文化プログラムとの連携、スポーツ・文化・ワールドカフェの開催等を通じ、オリンピック・パラリンピックムーブメントを全国展開することが重要。

文部科学省（スポーツ庁）オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議
(平成27年2月～平成28年7月、全9回)

図 8

東京2020 オリンピック・パラリンピック教育プログラム「ようい、ドン!」

東京2020組織委員会は、東京2020大会を一過性のイベントとするのではなく、大会を通じて子どもたちがオリンピック・パラリンピックの価値やスポーツの価値を学ぶことで将来に向かって成長し、次のようなレガシー（遺産）を創出することを目的とし、「東京2020教育プログラム」（愛称：「ようい、ドン!」）を展開してまいります。

<オリンピック・パラリンピック教育により創出するレガシー>

自信と勇気：失敗を恐れず自ら行動を起こす人材、将来に向かって自信と勇気を兼ね備えた人材を育てていく。
多様性の理解：障がいの有無、人種、言語等、様々な違いがあることを理解しつつ、共につながり、助け合い、支え合って生きていく力を身に付ける。

主体的・積極的な社会参画：

東京2020大会を契機に、国際社会や地域社会の活動に関心をもち、主体的、積極的に社会に参画できる人材を育てていく。

学校事業認証「ようい、ドン! スクール」



図 9

て学ぶということ、スポーツの価値や文化といったところですね。そして共生社会。主体として東京都、組織委員会が全国に広げていくということで、オリンピック・パラリンピックムーブメントを推進していくことが有識者会議に先立ってまとめられた内容です。

そしてそのプログラムとしては、オリンピック・パラリンピック教育のプログラム「ようい、ドン!」をご存知の方いらっしゃいますか？ どう思いますか、このネーミング。しかもこれはここに示されているように、オリンピック教育プログラムとして組織委員会が始めたのですけれども、「Get Set」とか「Transforma」のようなものとはちょっと異なるんですね。インターネットを通じてそこに登録して入っていくと教材や色々なプログ

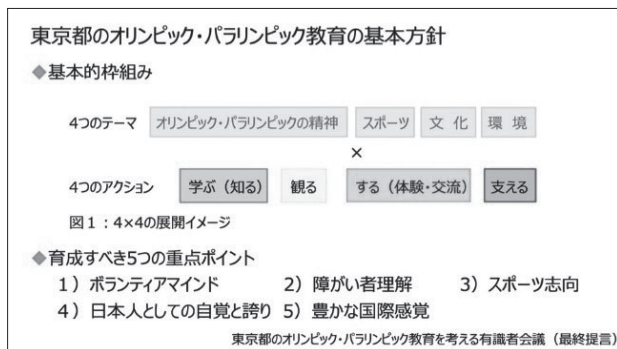


図 10

ラムがあるというスタイルではなく、日本は日本の教育システムを使った、つまり、教育委員会制度ですね。文科省が何か伝えようとすると、各県の教育委員会に伝わって、各県の学校にバツとおろせるという、そういう形が日本で確立しているので、それを使うことでwebの登録システムはあまり必要がないということなのだと思います。私は始めそういうのをなぜやらないんだろうな、と思っていたのですが、結局このプログラム自体は、ここに入ると全部見えるという状態にはまだなくて、色々なものが整備中という感じですね。もちろん組織委員会のホームページを中心にやっていくんですけれども、そこまではJOCですとか色々な組織が資料や教材を提供していますし、例えば東京都の教育委員会のサイトを開くと色々な教育実践例を見ることができます。つまり、少し分散しているっていうのは事実ですね。現在、教育プログラムを実践した学校には、「よい、ドン！スクール」として認証される制度があって、このマークが使えるようになっています。オリンピックとパラリンピックのシンボルマークは非常に厳しく管理されていますので、こういう形が見えるような利点があるといいのだと思います。

次に東京都のオリンピック・パラリンピック教育の基本方針はご存知ですか。「オリンピック・パラリンピック教育の精神」、「スポーツ」、「文化」、「環境」という4つのテーマを、「学ぶ」、「観る」、「する」、「支える」の4つのアクションで展開しようというのが東京都のやり方です。これで育成すべき5つの重点ポイントというのも示されています。そして東京都は今、年間で35時間オリンピック・パラリンピック教育をやらなくてはならないということで、都内の私立も含めた小中高すべての学校でやるように進められています。

このように東京都はすごく進んでいるのですが、

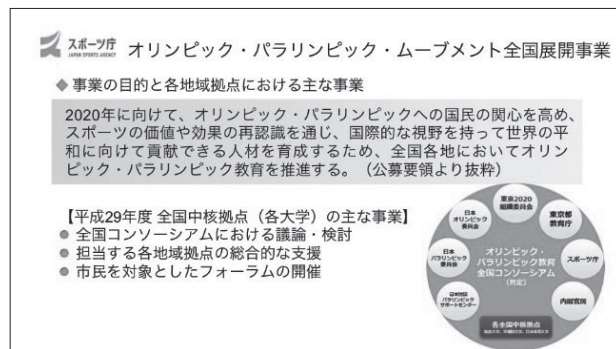


図 11

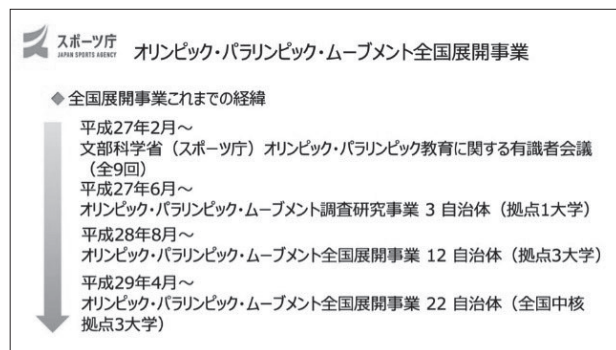


図 12

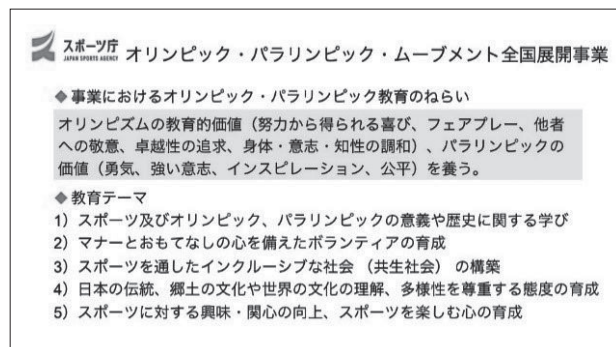


図 13

全国を巻き込んでムーブメントを起こさなければいけないだろうということで、スポーツ庁が中心になってオリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業を展開しています。この事業は平成27年に調査研究事業という形で始まって、最初の年は筑波大学だけが3自治体、宮城・京都・福岡を相手に、試しに始めてみたということです。平成28年度からは、早稲田大学と日本体育大学が入り3大学が拠点になって、自治体を増やしています。今年は、7自治体ずつですので20自治体が対象となっています。平成29年度からは各自治体が直接スポーツ庁と契約する形になっています。具体的な活動の流れとしては、拠点の各県の代表の方が集まって、年度の方針を伝える全国セミナーから始まり、各県にもど

学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の展開の方法 (アクション)

- ① 教科教育型：教科における教材としての活用
- ② 総合型：総合的な学習の時間の活用（教科を越えた総合的な実践）
- ③ 行事・発表型：学校行事（文化祭・運動会など）の活用
- ④ イベント型：オリンピック教育を前面に出したイベント（講習会や体験教室など）の開催
- ⑤ 生活型：日常生活（運動活動）にオリンピックに関連付けた活動
- ⑥ 交流型：他国の文化や言語を学ぶ、他国の学校などと交流する、校種を超えた交流など
- ⑦ その他



図 14

オリンピック・パラリンピック教育を通して得られた成果と課題（宮崎,2017）

カテゴリー	成果
オリンピック・パラリンピック、スポーツ	オリンピック・パラリンピックへの関心の高まり、スポーツへの関心の高まり スポーツの意義・価値の理解、楽しむ心 障がい者、障がい者スポーツの理解、パラリンピックの認知度の向上
文化・国際	国際理解、他国の文化への関心の高まり 地域振興、伝統文化への関心の高まり 目標に向かって努力することの大切さ、あきらめずに努力することの道徳的価値、姿勢 大切さ、おもいやりの心、気遣いの気持ちが身に付いた
課題	
早い時期からの計画、年間計画への位置づけ、継続的な取り組み	
教科教育との関わり、教育課程への位置づけ、時間の確保（調整）が困難	
学校全体の取り組み、教員の共通理解、教科の連携	
講演以外の内容の工夫、講師の選定・交渉が困難	
予算の確保（講師謝金、使途の制限）、用具・施設の不足	
地域・保護者との交流、連携（広報、啓発、人材の育成 等）他機関との連携	

図 16

オリンピック・パラリンピック教育の活動内容

(宮崎,2017)

平成28年度全国展開事業に参加した12府県のうち、T大学が担当した1府3県の推進校111校
(幼稚園1園、小学校29校、中学校31校、高等学校33校、特別支援学校14校、大学3校)

活動内容	宮城	茨城	京都	福岡	合計	(%)
オリンピック講演、体験	7	7	17	9	40	36.0
パラリンピック講演、体験	4	11	15	9	39	35.1
バラスポーツ体験（体育授業含む）	1	6	14	5	25	22.5
調べ学習／発表	4	7	10	4	25	22.5
特別支援／福祉施設との交流	4	0	13	2	18	16.2
おもてなし講座	3	10	1	2	16	14.4
オリンピックスポーツ体験（体育授業含む）	4	4	3	2	13	11.7
オリンピックコーナーの設置／オリパラ新聞・便り	3	2	3	1	9	8.1
伝統文化学習・講習	4	1	2	1	7	6.3
道徳（おもてなし／努力する心）	2	1	1	1	5	4.5

その他：障がい体験、学校行事活用、教科でのオリンピック学習、イベントの開催、ボランティア、n=111
他国との交流、スポーツ体験への参加、人権教育

図 15

オリンピック・パラリンピック教育を大会後もレガシーとして残すためには...

- ◆学校の教育課程への位置づけ：新たに付加されるものではなく、教科等の学習内容を学ぶための有効な教材として位置付ける必要がある。
- ◆ホストタウンとして迎えた国やチームとの交流の継続
- ◆批判的思考を育むような題材と教材の設定：オリンピック・パラリンピックはさまざまな問題を孕んでおり、今後の大会のあり方も変化していくものである。
 - ・規模の巨大化、予算の増大、開催都市の負担の増大→立候補する都市が確保できない現実
 - ・種目数の増大とオリンピックの価値
 - ・ドーピング問題
- ◆パラリンピックの整備・改革：障がい者スポーツと卓越性、クラス分けの問題
- ◆義足の選手のオリンピックへの参加の是非、義足・装具の問題

図 17

って、各自治体で指定した推進校の先生達を集めて、地域セミナーで具体的な活動の方針や事例を伝えます。そして学校で色々と実践をして年度末に報告会をするという形を1年間で回して、推進校にお金が配分されますので、それを使って色々やって下さいね、というようなシステムです。

そして、先ほどの東京都の基本方針（4つのテーマ×4つのアクション）というのをイメージして欲しいのですが、本事業では以下のような目標、教育テーマを示しています。1) オリンピックの意義や歴史、2) おもてなしやマナー、3) 共生社会、4) 伝統や文化、そして5) スポーツそのもの、というテーマです。これらをテーマとして学校の中では実際にどんな時間に活用できるかという、①教科教育、②総合的な学習の時間、③すでにある学校行事、そして④オリンピック・パラリンピックに特化したイベント、⑤生活に密着させる、⑥交流、外国の一国一校運動などを含めてですね、そういったもので展開できるのではないかと提案しています。そして実際、昨年度の報告書について、111校を対象にして調べたところ、結局オリンピックとかパラリンピックを呼んで体験した話を聞くというものが多いです。あとバラスポーツ体験も近年は多いですね。そして調べ学習とか、おもてなし講座みたいな形が多い。そして成果としては、

もちろんオリンピック・パラリンピックへの関心の高まり、スポーツへの関心の高まりなどですね。そして、障がい者への理解、文化・国際に関する理解や関心、道徳的な価値です。こういったものが身に付くということが挙げられていました。そして課題としては、これは実は単年度計画なものですから、運営上の問題で、契約が遅くて計画が立てられないとか、お金の使い道として何に使って良いか、使っていけないというのが難しいとかそういう課題が色々挙げられていました。

最後に、こういった形で展開していくと、やはりオリンピック・パラリンピックが終わったら、教育も終わるだろうということが予測される訳ですが、スポーツ庁はそもそもこれを契機にしてと言っていますので、もちろん終わってからも続けていくということです。「レガシー」という言葉を使いますが、オリンピックやパラリンピックを開催したことで後世まで残る様々な影響のことを言います。それは、形のあるもの、形のないものがあるのですが、教育は形のないものですね。学校教育の中に残していくにはどうしたらいいか、ということが課題となる訳ですが、やはり学校というのは新たなものが入ってくることに抵抗があります。学校現場はただでさえ忙しく、やらなくてはならないことがいっぱいある訳です。ですから、本来ある教育課程の内容にオ

リンピック・パラリンピックを活用する様な使い方でないと続いていかないということです。

それから2つ目は内閣府が進めていますホストタウン事業です。今度、慶應義塾大学もイギリスチームを迎えるということですが、地域の、日本全国の小さい町とかがホストタウンで何かの競技の事前合宿などを呼ぶという形で関係ができる訳です。大会後にそういった関係を継続していくというのが1つの方法だと思います。

3つ目は、「オリンピックは素晴らしいものだ」というだけではなくて、色々な問題があるだろうと。いい点も悪い点もきちんと見据えて形を作っていくということです。そしてその課題を継続して、ディスカッションしたり、考えていくということが大事だと思います。パラリンピックについては、こんな無責任なことと言ってもなんですけれど、未整備なところがたくさんあると思いますので、これを契機に色々と改革して行くことも大事だろうなと思っています。レガシーとして残すためにはこのようなやり方がいいのではないか、という提案です。以上で発表終わらせていただきます。ありがとうございます。

福士：宮崎先生ありがとうございました。我々が分かっているようで分かっていないオリンピック教育や現状などに関して色々と、短い時間の中でしたけれどもお話し頂きました。3名のシンポジストの方の発表が終わってから質問も含めまして議論をしていきたいと思いますので、引き続きお話を聞いて頂ければと思います。それでは続いて、二宮先生。

二宮先生はボランティアのシンポジウムを開催すると決まったあとにどなたかお話しできる方がいらっしやらないかな、と我々の関係を通じて当たっていたところ、直接知り合いだったわけではないのですが、お話をした時に快く引き受けて頂きました。その打ち合わせの際にもボランティアについてお話しいただいたのですが、ボランティアに対する熱意も伝わり、非常に面白い話を頂けるのではと楽しみにしております。それでは、よろしくお願いします。

スポーツボランティア教育の展望

二宮雅也（文教大学）：文教大学から参りました二宮と申します。私は大学で、スポーツボランティア教育を授業の中で実践しています。そのほかにも、日本財団ボランティアサポートセンター参与として、2020年東京大会のボランティアサポートを行っています。具体的には、大会ボランティア8万人、東京都の都市ボランティアで1万人、さらに神奈川、千葉、埼玉、宮城、福島、北海道と全国の会場ボランティアを合わせて約11万人から12万人位必要だと言われていますが、この、12万人のボランティアが共通して学習する教材作成が、私に課せられている今一番の業務でございます。それから、その12万人位を選抜していく時に、面接官も今から500人養成しなければならないのですが、この面接官も実はボランティアなんです。その面接官の選抜も業務として引き受けております。それから、集合研修といって選ばれたボランティアさんの研修があるのですが、その時に講師が必要になります。この講師も何百人も必要な訳でありまして、その講師が使うテキストの作成と講師の選抜というのをあと2年位でやってしまわなきゃいけないということで、大変荷が重い状況でございます。その傍ら、傍がどっちかわからなくなってしまうんですけども、今日は自分がやっているボランティア教育について発表していきたいと思っております。

私は文教大学の越谷キャンパス（埼玉県越谷市）にありまして、私が担当している「コミュニティイベント論」



二宮雅也氏



図 18

という授業の一環で「さいたま国際マラソン」にボランティアとして参加しております(図 18)。私は大学で「ボランティア論」という授業を担当しています。その専門としては、大学の授業でボランティアに参加することに歯がゆい思いもあります。ただ、今そういう機会を与えないでボランティアする可能性がどれ位あるのだろうと考えた時に、自らボランティア精神があってボランティアをやる学生も確かにいるんですが、そういう学生だけではないのも事実です。まずは経験してもらうことによって興味関心を持って、今後ボランティアに参加するパターンもあると思いますので、今はそういう意味で積極的に経験とか体験をさせるものだとは割り切って、この授業は展開しています。

私も学生と一緒に活動しながら現場の雰囲気とか様子を見てやっている訳ですが、例えば給水のコップの置き方一つでも非常に勉強になります。マラソンでは最初の選手はすごいスピードで来ますので、間隔を詰めておくとコップがバラバラと倒れてしまう訳ですね。ですから、トップ選手のスピードに耐え得る間隔でコップを置く訳なんですが、その内だんだん 6 時間ぐらいでゴールをする選手が来ると、立ち止まって水を飲み始めるんですよ。そうすると、並んでいるものでは足りなくなるんですね。その時は、すし詰め状態のものを置いて適当に飲んでくださいという形になるんですけども、時間とともにコップの配置を変えていくんです。学生が自分で考えながら、そろそろこの位の間隔じゃ足りないとか、自分達で主体的に考えてやり始めるというのは学びの要素としては大きいかなと思っています。それからテーブルの設置も同様です。道路側に机を置いた方が実はボランティアとしては活動しやすいんですけども、世界記録を狙っている選手は実は 42.195km を計測した一番ギリギリを走ってくるんです。だから計測ポイントに邪

魔にならないように机を設置してあげないと世界記録は狙えないのです。ですからそのような自分たちが競技に関わっているんだというその関わり意識ですね、この辺もボランティア教育の面白いところかなという風に思っております。ちょっとこれ見てください。

(動画)

これもですね、別に「頑張って」と声を出して応援しろとかそういう指示を特別には与えていないんですけど、勝手にこうなってくるんですよ。やっぱり雰囲気飲まれてきて選手達とどうコミュニケーションすると楽しいのかなということを学生は考え始め、ここの学びの主体性が出てくるところで非常に面白いポイントだなという風に思っています。

(動画)

これなんかすごいです。実は、給水所のコップが切れたのです。それで、コップが切れたらどういう指示が事務局から来ているかという、コップが切れたら業務は終わりという指示なんです。ですが、学生達は次から次へと来るランナーの数を見てこの給水所は閉じたらいけないと自分達で判断したんです。それでとった策がこの大きなペットボトルをそのまま置いて、どうしても飲みたい人は飲みに来るだろうという作戦に出た訳ですね。マラソンに慣れてる人は、手前の給水所でもらったコップを取っておいて持って来る人もいるんですけども、やっぱり初めて走られる方とかは、もうラップ飲みでいいからということでもらっていく人もいます。もちろんこれは、衛生上とか普通に考えると NG です。NG なんですけども彼らはそういうことを、分からずにやっていることなんですけれども、でも自分なりに工夫していることは事実として捉えられるということですね。

(動画)

これも非常に面白いシーンでありまして、実は彼女たちは道路の手前側で給水の作業をしていたのなんですけれども、仕事が終わったんですね。終わってすることがなかったから今度は道路の真ん中に移動して折返し地点を逆に進行してくる帰りのランナーに応援を勝手に始めたんです。どうやって応援するのかっていうのは手を振るんです。手を振ると相手が手を振り返してくれることに気づいたんですね。でも実はこれも NG でして、道路を渡って中央分離帯で応援することは禁止されているんです。ダメなんですけど、彼女達は選手が喜ぶだろうと自分で考えた訳ですね。ここにも、主体的な学びのポイントが



図 19

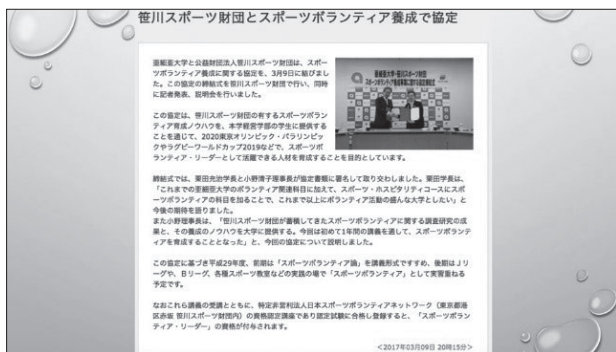


図 20



図 21

くつかあって、この辺が面白いところなのかなという風に思います。

それから、障害者を支えるスポーツボランティアもたくさんありまして、写真(図 19)は視覚障害者の伴走の練習をしている様子で、歩いたりとか簡単に軽く走ってみたりみたいなことから始めることによって、一緒にスポーツをしながら支えるようなタイプのボランティアもあるのかということに気づく訳ですね。例えば、リオデジャネイロパラリンピックの時には、道下選手が銀メダルを取りましたけれども、この時も 2 名のガイドランナーが 20km 地点で交代をしてメダルを取っていました。パラリンピックではメダルを貰うとガイドランナーも一緒に表彰されます。ですから、こういうパラリンピ

ックの中にはトライアスロンとかもそうですけれども、ガイドランナーと選手とが一緒にプレーをしていくというような要素が結構ありますので、教育にはもってこいのプログラムなのかなという風に思っております。

しかしながら、近年どうしてもこの東京 2020 大会を意識したボランティア教育という波に少し押されておりまして。私も関係しているので文句を言えないのですが、色々な形でスポーツボランティアを専門とする NPO とか団体と大学が提携をしてスポーツボランティア教育を進める。そしてスポーツボランティアに単位を出すと。単位を出してリーダーの資格を取って、できれば大学生がそのままそのボランティアとして東京 2020 大会に関わっていけるような、そういう仕組みを作っていこうという動きが盛んになっているんですね。このタイプの怖い所は、東京 2020 大会のあとが保証されるのかといった時に、多分これ終わっちゃうんじゃないかなという気がしているんです。では大学生は一体どんなモチベーションを持っているのかというので、まずはちょっとイギリスのボランティアに採用された人達の声を聞いてみたいと思います。

(動画)

結構キャリアのことを意識しているような声が若者の中に多いかなと思います。ただ日本の場合は新聞(図 21)にも出ていますが、「ボランティアって結局タダ働きでしょ」みたいな声も大学生の中からは多いですね。例えば面白かったのが、「派遣社員なら時給 2,400 円には値するのじゃないの」とかそういう具体的な意見が出てきたりとかですね。ある学生の方は、中国語を勉強しているのだけれど、外国語を話せるようになることまでの努力を考えるとこれボランティアにやれというのはおかしいんじゃないかとかですね。そういう様な有償を求める声が新聞上にも出たりしています。ですから、そもそのボランティアとは何だろうという教育も必要なんだろうと思います。また、若い人達を巻き込んでいくという所で何を留意しなければいけないのかなというところも、後々ディスカッション出来たらいいなという論点です。

それからもう 1 つは、オリンピック・パラリンピック教育のことにに関してですけれども、私の大学も私立大学の中では多くの教員採用者を出している大学なものですから、とにかく大学に入って来る学生は教員志望者が多いんですね。そこで、教職を目指す学生に、オリンピッ

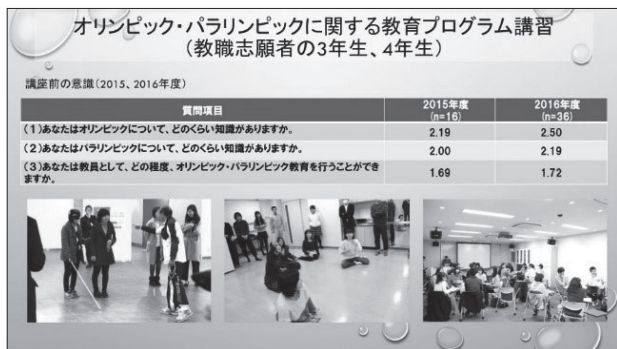


図 22

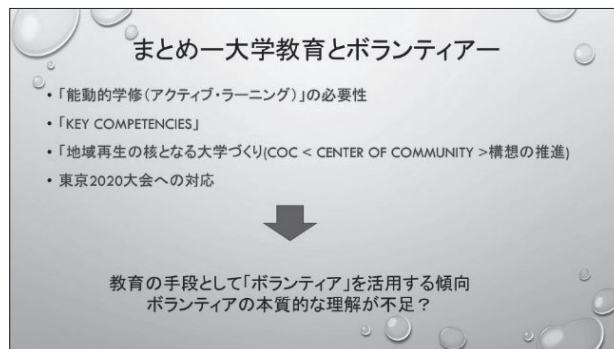


図 24

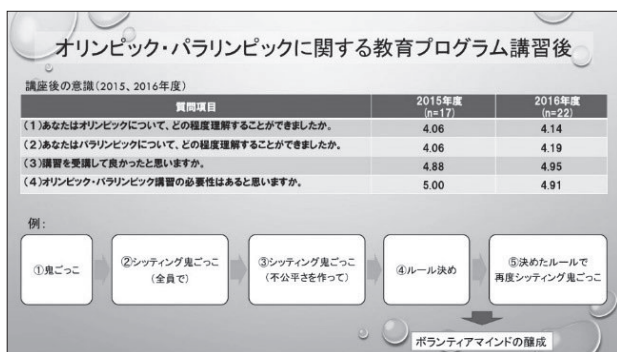


図 23

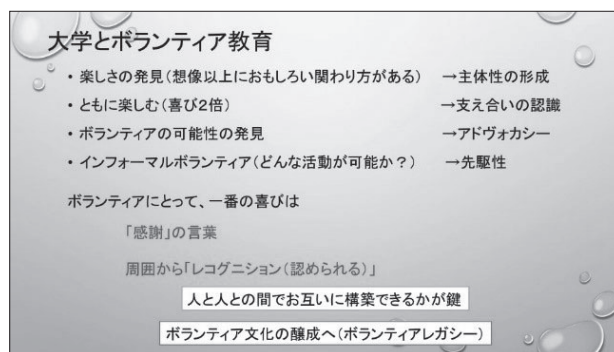


図 25

ク・パラリンピック教育プログラム講習を2年間にわたってやりました。講習前にアンケート(図22)をとると、ほとんどの学生達がオリンピック・パラリンピック教育を「やれない」とか「全然知識がない」という結果が出ました。講習後に同じアンケート(図23)をとると、理解度等の数値は上がってきて、そして「オリンピック・パラリンピック教育の事前教育は必要か」という質問ではほとんどの学生が「必要」だと感じている結果になりました。

学生が考え出したオリンピック・パラリンピック教育プログラムについてご紹介したいと思います。その1つが「シッティング鬼ごっこ」です。座ったまま鬼ごっこをした後に、立ってやれる子と座ってやれる子とを分けて不公平さをあえて作ってみる。そしてその中で、みんなのできるルールってなんだろうということを考えて再度決めたルールで鬼ごっこをしようと。多分この辺が今日話しているボランティアマインド、つまりどんなことをすると支えになるのかということにつながると思います。実はルール変更というのはボランティアの精神の中でもすごく重要なんです。特にみんなが楽しめるルールを作るとかですね。最近「ゆるスポーツ」とかも流行っていますけれど、ここは非常に重要な視点になります。

私も最近小学校に行ってオリンピック・パラリンピッ

ク教育の授業をすることが多くなってきたのですが、本当に子供達にオリンピックとかパラリンピックを伝えるのは難しいです。大学では偉そうに喋っているのですが、小学校3、4年生を対象にして喋ると、もう普段使っている言葉が使えないですね。ですからそこを自分なりに平易に落として考えて身振り手振りで教えていくということが大変でして。こういう教材の開発とか、何かわかりやすいものとか、オリンピックとパラリンピックを一緒に授業できるものとか、そういうものは今後必要なのかなという風に感じております。

最後に、大学でボランティア教育をする意義ですが、やっぱり楽しさがどこかにあるんですね。その楽しさを見つけてもらえとおそらくその後主体的に関わって頂く、つまり自分から自発的に動き始めるボランティア教育に繋がっていくのではないかと思います。それから先程の伴走の事例にあったように、選手と共に楽しんだりとか、地域の人たちと関わって遊んだりとか、そういうことで喜びが二倍になるということを知ると、支えるだけでなく支え合っているんだなあという感覚の醸成、この辺に繋がってくるのかな。それからボランティアをしながら何か可能性とか課題を発見するということも大事で、それはアドボカシーと言いますが、この醸成に繋がっていくとか。それから、募集されているボラ

ンティアだけではなく自分達でこんなボランティアで
きないだろうかということを考えることで、先駆性、ど
こが整備されているどこが整備されていないかというこ
とに繋がるのではないのかなという風に思います。

そして、ボランティアを継続するための一番のポイン
トは周りからの感謝の言葉と周囲から認められるという、
レコグニションと言われてまして、それをお互いに関係
性を構築できるかが鍵なんです。そのためには、基本的
にはボランティアに興味がある人にボランティアの話を
しても意味がなくて、ボランティアに興味がない人にボ
ランティアの人達はこういう活躍をしているということ
を教えていかないと、この文化は醸成できなくて、それ
ができるボランティアはレガシーに残る様なパターン
になっていくかなという風に思っております。どうもご
静聴ありがとうございます。

福士：二宮先生ありがとうございました。ボランティア
の本質とその教育の難しさ、あとは最後におっしゃっ
ていましたボランティアを文化として作っていくために
というところは課題もあるのではないかと、いうところで
また議論を深めていきたいと思えます。

それでは、続いて稲見先生よろしくお願いします。稲
見先生は、今年の4月から慶應義塾大学に着任されまし
たけれども、着任して早々オリンピックチームのプロジ
ェクトの中心として今まさにたくさん活動していただい
ております。その実際や今後の展望についてお話頂け
ると思います。それではよろしくお願いします。

KEIO スポーツレガシー

～東京 2020 オリンピック英国サポートを 通じた“生きる力”を備えた人間育成 プロジェクト【KEIO 2020 project】～

稲見崇孝（慶應義塾大学体育研究所）：慶應義塾の稲見
と申します。よろしくお願いします。私からは、慶應
義塾に2020年の6月頃にイギリスチームが来ますので、
そこでどんな取り組みをするのかということを実例的に
ご紹介させていただければと思っております。実際には
イギリスチームの受け入れを通じて、慶應義塾大学に何
を残していけるのか、というのが焦点であります。

私たちが“生きる力”というものを残していければ、
世の中の流れに飲み込まれずに大学の教育の中にどうや
ってレガシー構築をつなげていくかということをしっか
りと考えていく必要があるのかなと思っております。ス
ポーツボランティアを養成するための既存プログラムは
大変素晴らしいものですが、“慶應義塾大学らしさ”を
付加するために、自分たちで何が必要かを考えて自分た
ちでそれを養っていければというところをポイントにし
たいと思っております。

2020年の6月頃になりますが、イギリスチームが日
吉にやってきます。慶應義塾だけではなく、横浜市や
川崎市と協力してイギリスチームを支えていくことにな
るわけです。横浜市や川崎市は、それぞれにスポーツボ



稲見崇孝氏



図 26

ランテニアセンターがありますが、慶應義塾の場合はどこがアクションを起こしていくのかというのが KEIO 2020 project という我々の組織です。慶應義塾大学のボランティアサポートを担おうという取り組みを本日も紹介いたします。

我々は 2016 年から活動しており、可能な限り学生主体で運営することを念頭に置き活動を進めていますが、私たちだけでプロジェクトを進行するのではなく、横浜市や川崎市と足並みをそろえて、共通の目標を持ってサポート体制を強化していこうという話し合いを、最近行っています。

共通の目標に関して、1つ目は、やはりアスリートファーストです。選手をできる限りベストなコンディションで選手村に送り出そうという目標です。

2つ目は、宮崎先生からもお話がありましたが、メダルを取るだけでなく、地域振興を含めた色々な要素から横浜市や川崎市と地域を盛り上げていこうという目標です。

そして、3つ目は、イギリスから色々な文化の影響を受けて、できればそれを慶應義塾大学らしく咀嚼して、日本の魅力も伝えていこうという目標です。このような目標を踏まえて、慶應義塾大学を中心としてどんなレガシーを残していくのかを日々プロジェクトの皆と話しています。

さて、日吉キャンパスに一体どんな種目がやってくるかということですが、いくつかありまして、今工事をしております新記念館、そして陸上競技場、鶴谷の体育館といった色々な施設を使いまして、2017 年 3 月時点で 13 の種目を受け入れることになっております。横浜市は国際プール、川崎市は等々力競技場を拠点に色々な種目が展開されますが、やはり群を抜いて種目数が多いのが慶應義塾大学の特徴となります。日本には、



図 27

体育学部やスポーツ科学部、健康科学部、これらをミックスした学部もいくつかありますが、こと慶應義塾大学に関しては、文学部、経済学部、法学部、商学部、理工学部、医学部、薬学部の学生が日吉キャンパスに通っており、それぞれ滞在する学年・期間は決まっておりますが、比較的どこがスポーツに特化するのかというと決まった学部はございません。これをどうやって捉えるかは、捉え方次第で、真っ白なキャンパスの上にどんどん新しいものを広めていこうと、今のところはプロジェクトを進行する中でどのようにしてスポーツボランティアの教育をしていこうかを考えています。

二宮先生がおっしゃっていたスポーツボランティア養成システムを用いるのも 1 つなのですが、やはりなるべく慶應義塾大学のレガシーを残していくことを考えると、慶應の歴史や大学の特色を加味する必要があるのではないかと考えております。そのため、結果的にはオリンピック・パラリンピックは題材の 1 つということであって、最終的には 2020 年の後にもしっかりとレガシーを残していくという取り組みが必要です。イギリスチームが来るということが決まって、すぐにシンプルな KEIO vision (アジェンダ) を立てました。

2017 年は、組織の確立から始まり、本日のシンポジウム開催とリンクしていきまして、オリンピック・パラリンピックの勉強につなげていこうと考えています。2018 年も何回かシンポジウムを開きますが、来年は現在組織している学生らとともに英国を視察に行くという計画が進んでいます。一方、国内では日韓 W 杯の時に淡路市にイングランドが来ていますので、関連地域とコンタクトをとり国内でも視察を行う予定です。勉強のテーマとしては、ジェンダーとか LGBT とか現実的な問題課題をどんどん取り入れていこうと考えておりますが、この vision が前倒しになるなど、色々な修正を必要とする現



図 29



図 30

います。

2017 年も 12 月で終わりですので、これまでの足跡を紹介させていただきます。

1 つ目は、LINE などに興味を持ってくれた学生に対する定期的な説明会や不定期で行うガイダンスでの募集です。ガイダンスは、新 1 年生のためのもので、新 1 年生に対してプロジェクトの取り組みを紹介する時間を大学からいただいております。

2 つ目は、運営委員会の会議です。月に一度定期的に行っています。

3 つ目は、対外的な活動が増えていきますので渉外グループに在籍する学生を中心にしましてマナーインストラクターを招いてのマナーアップ研修会を行った様子です。

4 つ目は、神奈川県から依頼のあった東京五輪音頭神奈川県 ver. にも出演させていただきました。

5 つ目は、SNS の本格運用です。特に facebook に力を入れているのはイギリスのチームが調査を行った結果を反映しています。Facebook や Instagram、twitter といったいろんな SNS の媒体がありますが、どれが一番イギリスで使われているかを調査した結果によれば、facebook が一番多いというのが理解されています。ですので、私たちもイギリスチームに足並みを揃えて facebook を使っています。

6 つ目は、ポスター制作です。最初にもお話しした通り、慶應義塾大学にはスポーツ科学部などの専門学部がないので、しっかりとした教育をしていこうという取り組みの一環でイギリスを含めた外部向けのポスター制作を行っています。学生はそれぞれテーマを考えてポスター制作に向き合っています。これは実際にイギリスチームが来た時に、横浜市や川崎市のことを全く知らずに来て、知らずに帰るという現実に対応したもので、作ったポス

ターをイギリスチームや外部の方の目に止まる位置へ掲示して私たちのことをもっと知っていただこうといった取り組みです。

7 つ目はパネルの製作です。今、記念館を工事しています。記念館前に置く資材を囲む防壁パネル（白い高さ 3m のバリケード）に、機運を高める目的でオリンピック・パラリンピックに関するシールを貼らせていただけることになり、作業がスタートしました。このパネル制作は約 1 ヶ月間、オリンピック・パラリンピックの楽しみ方をいかに伝えるかをテーマにみんなで考え、提案されました。

8 つ目は、スポーツには観る・する・支えるといった視点がありますが、まずは実際に見たことのないスポーツを観戦しようということで、フェンシングの W 杯を見に行く活動がありました。ちょうど昨日ですが、川崎にありますブレイブサンダースさんというプロバスケットボールチームにお願いしてボランティアを体験するという企画もスタートしたばかりです。

9 つ目は、横浜市や川崎市と育成システムを共有していこうといった会議で、学生がスライドを作成し、発表する、という機会がありました。マナーアップ研修会で行った名刺の渡し方も実践されました。

最後になりますが、私たちの取り組みをどのように残していくのかということです。いくつか二宮先生がおっしゃっていたアクションを考えると、「知る」ということと学生が「考える」という要素が必要かと考えます。そして、考えたものを慶應義塾大学なりに再構築してイギリスのチームを招き入れるために「作る」というということが、レガシー構築のために重要なポイントになっていくのではと考えています。

2012 年のロンドン大会の時に、ジャマイカ代表のボルト選手（当時）が「全てはバーミンガム大学のおかげ

です」と言ってバーミンガム大学の躍進を助けたことは有名ですが、私たちもそこへ習えとは考えていません。「全ては慶應義塾大学のおかげです」と言ってもらえればそれはそれで嬉しいのですが、やはり、ホスト3機関でやったということが大事なので、「全ては横浜市・川崎市・慶應義塾大学のおかげです」と言ってもらえるように取り組んでいきたいなと思っています。

そういった中で醸成されたものは“生きる力”につながっていくと思っております、福澤諭吉先生がおっしゃっていた言葉になぞらえて「先ず生きる力を成して後に社会の先導者たれ」という最終的には社会に還元できるような意味を込めた副題を添えたところです。このようにして蓄積されたものを慶應義塾大学のレガシーとして残していきたいです。

全体討論

福士：稲見先生ありがとうございました。それでは、この後会場をセッティングして議論に入って行きたいと思っています。

それでは残り30分くらいのお時間ではありますが、3名の意見を受けてまずは竹市先生の方から、お話をいただければと思います。竹市先生は、全国大学体育連合関東支部の支部長をされております。それでは、竹市先生からお話をお願いいたします。

竹市勝（国士舘大学・（公社）全国大学体育連合関東支部長）：みなさんこんにちは。大学体育連合の関東支部の支部長をさせていただいております、国士舘大学の竹市と申します。本日は3名のシンポジストの先生方のお話を拝聴できまして、非常に色々な面で勉強になったと思います。私自身、体育社会学という分野ではなく、実験系の専門でして、こういったところは普段触れることがない分野なのですが、今回支部長ということでこういった大役を仰せつかっております。ここでは、私の国士舘大学の取り組みについて若干紹介させていただきながらお話をしたいと思います。

オリンピック・パラリンピック教育、これをやれと大学の方から御達しがあり、保健体育の部会がやれといった風に回ってくるのですが、そういった時にどうやって



竹市勝氏

やるんだろうな、といった話で我々も困惑したわけですが、今回の先生方のお話を参考にさせていただくことができたのは非常に良い機会になったのではと思います。オリンピック・パラリンピックというとスポーツということで、体育という部分が付きまってくるのですけれども、大学としてこのオリンピック・パラリンピック教育をどう進めていくのかという意味では、大学に存在する各学部が協力して学生にオリンピック・パラリンピック教育をしていかなければいけないと思います。国士舘大学では世田谷キャンパスには政経学部・文学部・法学部・理工学部・経営学部、そしてキャンパスは違いますが、多摩キャンパスには体育学部、町田キャンパスには21世紀アジア学部と様々な学部が存在しております。この各学部からのオリンピック・パラリンピックに対するアプローチということで、15回のシラバスの中のそれぞれ一時限分を使って、例えば政経学部であれば、政治とオリンピック・パラリンピックとか、経済とオリンピック・パラリンピックといった形の取り組みで、全学部によって学生を教育していこうというような段取りを進めている最中です。体育学部はもちろんそうなのですが、法学部ではオリンピック・パラリンピックと法律、理工学部では、オリンピック・パラリンピックと環境やテクノロジーといったタイトルでそれぞれの学部で自分たちの専門を生かしたアプローチ、といったところでオリンピック・パラリンピックとの絡みを学生に教育していこうという取り組みを起こそうと考えています。

今回、オリンピック・パラリンピック教育ということで宮崎先生、ボランティア教育の二宮先生、そしてプロジェクトのご紹介をいただきました稲見先生、それぞれの方々、非常に貴重なご講演をいただきまして大変参考になりました。これらの先生方のお話をディスカッションしながら、オリンピック・パラリンピックの教育、そしてボランティアというと大変広いエリアで色々なことを考えていかなければいけないのではないかとお話を伺っていて思いました。では、どこから手をつけていくのかというところが次の段階になると思います。今日はですね、先生方、あるいは学生の皆さんがお見えになっていきますので、それぞれの方々疑問に思うことや課題に思うこと、あるいは自分で考えていることの意見を出していただきながら最終的に次の段階、つまり来年は何をしていけばいいのかというところを見いだせればいいのではないかと考えております。また、忌憚のない意見をい

ただきながら、そういった最終的に次のシンポジウムに繋げられることを見つけれればよろしいのではないかと思います。長くなりましたが、私からの話は以上とさせていただきます。ありがとうございました。

福士：竹市先生ありがとうございます。今、竹市先生の方からありましたが、ディスカッションとしてそれぞれ挙がった課題等を深めていくべきでもあるのですが、オリンピック教育とボランティアという幅広いテーマの中でひとつの課題を見つけるといったことはなかなか難しいなと思っております。したがって、もし、3名の方のお話を聞いて質問等があればそういった形でもいいですし、何かご意見があればお話をさせていただければと思いますが、まずはフロアの皆様の方からはいかがでしょうか？

それでは私自身からで申し訳ありませんが、今私も慶應義塾大学のプロジェクトに関わりを持っていますが、そういったところで学生にきっかけを与えていくとか機会を与える、そして何かを学んでいくといったことも大事だと思っています。ただ、二宮先生のお話の中で巻き込んでいく留意点のような、もちろん経験をして主体的に行動することでそういった楽しさを発見していくことは大事なことだとは思いますが、そういった良い面だけではなく、何か気をつけなくてはいけないといったことも少し触れられていたと思うのですが、その辺についてお話しいただけると我々も次につながると思うのですが、その点はいかがでしょう？

二宮：これは捉え方が色々ですので、僕が考えていることが全て正しいとは思わないで欲しいのですが、オリンピック・パラリンピックというのはイベントの中ではすごく巨大なものです。つまり、その裏にはものすごいコマーシャルのお金が動いているというのが現状で、そういったイベントの性質というものをしっかりと見極めていかなければいけない。その辺の地域で行われている祭りを主体的に手伝うのだというレベルのものの関わり合い方とは違い、気持ちが向こうに利用されてしまうといったこともあるようなイベントの体質がありますので、そこは特に若い皆さんには見極めていただきたいなと思います。特にどういうところかという、ものすごく専門性や特性を活かすようなお仕事、例えば、資格を有してなくてはならないようなもの、例えば国家資格等を

持っていないとできない部署などもあるので、そういうものまですべてボランティアで補おうとしていいのかといったようなことに対して、まずしっかり疑問を持って欲しいなと。何でもかんでもボランティアでできるから、私は関わりたいんだ、僕は関わりたいんだ、という気持ちも分からなくはないのですが、次の社会といったものを作っていく中で専門性とか対価が支払われるもの、あるいは労働とかといったものを若い皆さんが考えていくことが必要だと思います。ですので、そこに関しては考えてほしいと思います。

具体的には、日本薬剤師会がボランティア協力要請を受けたということだけでもネットが炎上したりとか、特別な資格を持っているところに要請したら炎上したといったようなことがネット上では続いています、僕は都市議会側にデリカシーがない部分があるなと思っています。もう少しやはり人材というものをどう考えるかといったような哲学を作った上でこころはやはりボランティアの力を頼らないとできない重要なポジションだとか、ここは専門性を入れてより高いレベルでやらなくてはいけないとか、そのへん慶應義塾大学さんには色々な学部があるので、多分、オリンピック・パラリンピックのボランティアの仕事の分類からすると、逆に専門性が活かせる部分が大きいのではないかと思っています。ですが、専門性の活かし方を全部ボランタリーで済ませていいのかというところは、学生、大学生としての関わり方、将来どうやって関われるかというところで見極めて行かないといけません。やはり教育としてそこは一番重要なところだと私は思います。そこら辺がやはり一番気をつけてほしい、留意してほしいところだと思います。

福士：ありがとうございます。何かフロアからありますでしょうか。

村山：慶應義塾大学の村山と申します。実は昨年までシンポジウムをコーディネートしたのですが、昨年のテーマはリーダーシップ・プログラムを教育に活用するというので、昨年の日向野先生の理論で率先垂範という目標を共有したら他人を巻き込んで活動し、そのトレーニングをする場が必要だということで、それが体育スポーツにつながるということを昨年お話ししました。今日のお話にもつながるところが出てきていまして、今の二宮先生のお話ですとボランティアというものの自体を理解し

ないとうまくいかないということだと思いますが、大学の器としては、我々教員側は学生たちに何かしら目標を作ってもらって他人を巻き込むような活動をしてもらうことがとても重要だと考えています。そのため、ある意味ではとても大きく構えてレガシーにならなくても普段の教育に活用できるということも必要なのではと常日頃思っています。その辺に関するご意見をいただきたいと思っています。宮崎先生もいわゆる小中学生のプログラムで教科のカリキュラムが決まっているからその中に活用してもらおうということで教える内容が決まっているので、余分な事が入ってきているところだと思います。大学という器だと新たな学びの方策を作れる特徴があるので大学の方で足りないことがあるのではないかと私は思っています。そのため、スポーツを知るというようなことが教材になるということ、もう少し大学はどう考えたらいいかという点に対してご意見をいただければと思います。

宮崎：私が今日駆け足で紹介したのは小中高校の「中学校」なのですが、もちろんオリンピック教育そのものに対しては、大学も関わりがあるのですね。しかしながら、私が日頃いるところは教職のところですから、先程のお話もありましたけれども彼らが教員になった時にそういうことをできる人を育てるという事も1つですね。ですが、大学の中でのオリンピック教育ももちろん必要であって、高校までは学習指導要領というものに縛られていて、それで受験とか進学とかもありますから、学校の先生たちはそこに新たな負荷が課される感じがあるのですね。さらに何かやらなければいけないことが増える。そうになるとやはり厳しいので、教育課程に関わる者として、また生きた教材として世の中がこれだけ騒いでいるのに、学校の中だけオリンピックと関係ないと言うのではなく活用できるだろうというのが、先程の話です。そういった意味では、大学ではあまりにも自由度が高くて、それぞれの学部にはそれぞれの専門性を活かしてできるという意味では同じだと思います。ただ、大学も先ほどお話を聞いて思ったのですが、オリンピックに関わる政策ですとか社会的なことですとか、色々なことがあると思うのですが、そういったところがオリンピック・パラリンピックを教育のチャンスとか、生きた教材というふうに捉えているかが、なかなか難しいのではないかと。そうすると結局は学校の中の小さい小中、

高校は少し大きいのですが、そういった中と同じような問題になっているのではないかと思います。ですので、先ほどのように大学全体で、その選択がおそらく担当する先生の中に任されているのではということが事実だと思います。今、大学の中にも連携組織とかありますよね、そこで、大学の体育の先生かもしれませんが、中心となって他の学部に関わりかけたりして、おそらく生きた教材というお金もすごく動きますから、社会全体の経済ですとか、様々なところでスポーツだけの話ではなく活用できる。ただし現実問題としては、同じような問題があるのではないかなというふうに思います。

二宮：ボランティア教育の観点からお答えさせていただくと、やはりボランティアの教育の中でなぜそういうものが大学に求められているのか、まずはアクティブラーニングのような学びの形態の変化というものもありますし、またコミュニティとの関係性の構築であるとか、あるいは求められる社会人基礎力といったものが、ボランティアと相性が良いというのが僕の印象で、そういうこともあって学校側が積極的にプログラムに取り入れているのかなと思います。ただその中で、そういったものを見出していくと素晴らしい人間教育につながってリーダーシップを有するような良い人間が育つと思うのですが、社会というものは果たして実際にそういうものなのかを考えると、やはりそういう人が生まれるということは、そうではない人たちも目立つということでもあるので、やはり強制モデルというところで行くと、そこしか見られない教育というのはまずいかなと思います。やはりボランティア教育のいいところは、積極的に自分を磨きながら社会の課題に対して自分が向き合ってそれを解決するという流れの中で、自分と社会の関わり方だったりとか、時には負の状況にある人たちを正に戻してあげるとか、あるいは自分が不利になったときにどうすればいいのかどうかということを考えると、やはり生きて学んでいくということが一番のポイントなので、先生がそれを理解した上でプログラムを進めないと場当たり的にボランティアを当てはめていくというような形は危険だと思います。

福士：その他フロアの方からありますか？

学生：慶應義塾大学法学部の3年の山本と申します。二

宮さんにお伺いしたいのですが、最初のボランティアを集める段階において、おそらく学生側からの動きを求められているとは感じたのですが。そこで強制モデルを使わない場合、限られた大学生の学生の人数として求められている規定の人数を達成するために、入り口にどれだけの人を集められるのかというところで、自分は興味があって集まった側なのですが、興味がない人をどうやって集めていけばいいのかなというところが、今おそらく共通認識だと思いますが、学生側にインセンティブを与えないで行う何か事例というものをございましたら教えていただきたいです。

二宮：おそらくインセンティブがなくて集まるということはないと思います。なので、インセンティブは必要です。ですが、インセンティブというものが考え方で、現金ではなくて、自分たちが学んでいくことで将来どういうものが見えるかというところをやはり別々で訴えていくということ、そしてもう1つは、ムーブメントを作っていくということが大事です。やはり、やる気にさせるようなムーブメントというものは、人の心動かすものであったりとか、それはもしかしたら映像なのかもしれないし、SNS上でのコミュニティかもしれない。そして、最も重要なのは“あなたが必要なんだ”ということです。何人必要なので来てくださいというのではあまり響きません。あなたの力が必要なんです、というふうにしっくりと言う人がいるかどうかです。それはパッションのムーブで、今度平昌で開かれるオリンピック・パラリンピックのボランティアの名称は「パッションクルー」という名称なのですが、やはりその情熱というようなものを共有したいとか、そういうキャッチフレーズであるとか呼び名であるとか、慶應ならではのネーミングであるとか、そういったものが今おっしゃっていた人を集めるというところのマネジメントで必要になってくるのかなと思います。そこら辺は先生方がしっかりと考えていると思うのですが、学生からの意見を募集しながら、慶應ならではのマネジメントを強化するところというのは、さっきのボランティアの本質とは別に、まずは体制を整えるという観点からそういったところが重要なのではないかと思います。ちなみにロンドン、ゲームズメーカーですね。

福士：まさにそのボランティアに興味のない学生を集めるというところで、別のイベントを我々も担ったことが

ありまして、その際に全く人が集まらなくてなかなか苦労したのですが、そういったところで稲見先生は何かきっかけ作りとか考えているところはありますか？

稲見：先ほどおっしゃられていたようにムーブメントを作るというところがまず一番最初に大変な点です。できたばかりの若輩組織の場合には、少し強引にでもプロジェクトを進める必要があるのかなと思っていて、学生主体の組織だとしながらも、ある程度軌道に乗るまでには少し時間がかかるので、一時的に教職員が先導し、計画に沿って段階を踏んだプロジェクト運営が必要なのかなと思っています。そういった中で先ほど示したポスター制作などの多くの人の目に留まるようなものをしっかりと作って、そしてそれを作っている過程をちゃんと残し発信していく必要性を感じています。そういった取り組みを継続していくことが最終的には人を集めることにつながっていくのではないかと思います。

二宮：それでは少し甘いかもしれないです。どこが甘いかという先程言った、認めるという作業です。レコグニションというんですけども、あなたのことが必要なんだ、という所を誰かが直接的にコミュニケーションしていくという仕掛けを叶えてあげて、作業だけではなくてムーブメントを学生全員が持っているか、お互いがお互いを認め合って、そしてボランティアに参加していない場合も「お前すげえな」というような形、仕掛けが必要になると思います。もし慶應でそういうものが成功すると、他の大学も慶應モデルとして真似てくるのではないかと思います。

福士：実際にSNSを使うとかそういったところも始めてはいますけれども、興味のない学生にどう伝えるかということは課題の1つかなと考えております。

森：中央大学の森と申します。興味のない学生を集めるというところで1つ。私は、授業で単位も出るのですが、もう少しボランティアの多様な授業が各大学で展開されるというところが重要なテーマだと思います。私も今年、文学部で1つだけ「ボランティア論」という授業を開設したのですが、それは3.11以降、学生部にボランティアセンターができて、それを担当している文学部の心理の教員が努力して1コマ分の予算をとって始まって

おります。イメージとして単位にふさわしくないと、つまりアカデミックでは無いのではないかとということでも単位を認定することに障害があるのではないかとということも現実的な問題だと思います。そこで今日いくつか出てきたような多様な学問領域にそれぞれリンクしたところでのオムニバスのオリムピックの歴史だとかボランティアの歴史だとかと一定のことを網羅した授業をたくさん展開していけば、学部ごとに1つずつぐらいはできていくのかと思います。1998年の長野の時に、6つ位の大学の応援団が有志を集めてバス一台で長野にボランティアに行きました。その時に日本的な応援風景を披露して大喝采を浴びた事例があるのですけれども、それが特集されたテレビ番組の中でたくさんのボランティアの内容が入っていて、大学でもとても参考になるのかなと思っています。その後2000年のパラリンピックの時に、陸上競技場で時間の空いている時にプッシュダンスというオーストラリアの小学生が楽しんでいるダンスの音楽が流れると、連れて行っただけの2人の娘は学校で体験していたので一緒に立ち上がって踊っていました。そういった楽しみを陸上競技場のメイン会場の仕上げをする間の中にも盛り込んで楽しむという文化があるので、そうしたのも何か体験もしながら単位も認定できるような授業を私自身も模索しているところでもあります。2020年はオリンピック・パラリンピックの集中15時間というものを考えているのですが、そういったものの話も今日聞けましたのでその中で1つだけ、二宮先生に単位との関係のお話をもう少し詳しく聞きたいなということでもあります。

二宮：まず、色々なタイプの大学があって、授業があつてということを前提にしなければいけませんし、文科省が3.11の時に学生に配慮しろというメッセージを出したので、そこら辺の絡みもあります。僕が学生の時に福井県のタンカーの沈没事故で油の流出があり、現地に行ったんですね。それで帰ってきたら、その教授に呼び出されてこっぴどく怒られて、単位もくれず、すごく気を落とした記憶があります。しかし、僕はそれこそがボランティアであると考えていて、そういう思いをしてでも行って、行ったことに価値を感じるということがボランティアの大切なところだと思っています。それからすると今の大学生のボランティア環境というのはすごく良くて、学校の中にボランティアセンターがあつて、

ボランティア募集もしてくれる中間支援組織はいっぱいあって、ネットでもボランティアを探すことができるので、そういったボランティア社会をちゃんと概説するようなボランティア論、プラス経験というものがワンセットになったものに単位を出すというのが正しいやり方で、単にボランティアを経験したことに単位を出しますというところは違うのではないかと個人的には思っています。

富士：ボランティアについては、ボランティアの本質が分かっている教育をしていかないと難しいのかなというところと、森先生の方からお話がありましたけれども、教員と学生との関わりというのはすこしずつできてきているとしても、やはり大学の理解だとか大学のシステムだとかそういったところの関わりというのがまだまだ改善していかなければいけないなと感じています。そろそろ時間が迫ってきましたが、他に何かある方はいらっしゃいますか。

竹市：また二宮先生で申し訳ないのですが、先程の講演の中で「あなたが必要だから」ということで集める。多くの人を集めるためにどうすればよいかということの前に、ご講演の中に「ボランティアの気持ちを育ててあげなくてはいけない」というところがありましたね。その中で、実際に学生に座って鬼ごっこをさせる、不便さを体験させるというところがありましたけれども、こういった1つの例が、私は具体的に良い手だなと思ったのですが、こういったものがいくつかありますと、それを基に皆さんが具体的にイメージが広がっていくかと思うので、できればもう1つ2つそういった例を紹介していただけると助かります。

二宮：この前、都内の小学校でやったのは、パラ卓球という障がい者の卓球があるのですけれども、車椅子に座った状態でやる卓球選手の映像を見せて、その後に「君たちだったらどんなお手伝いができますか?」、あるいは「この選手は卓球はうまいけれども、何が苦手でしょうか?」、みたいな質問しました。すると、やはり勘が良く、そういう授業に入っているというのものもあるのですが、「打つのが上手い」と。「レシーブもサーブもうまい」、つまり「卓球がうまい」と。けれども彼らができないことは何なのだろうかと。卓球って、ボールが下にこぼれますよね。しかしそれを拾うことが苦手だと。毎回毎回、

車いすから降りることはできない。それなら、君たちはこのこぼれたボールを選手に持って行って渡すというのはできるのだろうかと聞くと、みんな「できる」と答えました。それから、次にアーチェリーの映像を見せたのですが、これも車椅子の選手でどんどん真ん中に当たっていくのですが、刺さった矢を拾いに行くのが大変です。そこで矢を抜いて持ってきてくれたら、日常的にこの選手はもっと練習できるよねということをしていて。つまりパラ選手はすごい技術を持った選手なのだけれども、すごい長けていることとやはり障がいのことでできないことがある。皆さんができるとするならば、皆さんが今もっている力で選手の力になれて、その選手が喜んでくれて、しかもその選手のためになれるようなことをしてあげることが最高のボランティアなのではないかと。そういったことを大学生バージョンでも応用していくと、具体事例として展開できるのではないかと思います。

富士：ありがとうございます。討論の時間が短く、そして今日のテーマがオリンピック教育とスポーツボランティアということで大きなテーマだったのですけれども、その中でいくつか課題が見えたのかなというふうに思っております。我々の方では2020年に向けてこういったシンポジウムをやっていきたいと思っています。そしてテーマも絞って来年、再来年と同じような形でより掘り下げた課題、テーマを見つけながらシンポジウムを開催していきたいと思っております。したがって、またそのような機会を通じて皆様の意見や考えを集約させて、2020年に向けて、そしてそれからどのようなものを残していくことができるのか、というようにつなげていけるようにしていきたいと思っておりますので、今後ともこのような機会に参加していただければと思います。それでは、本日お話しいただいた先生方に、もう一度大きな拍手をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

2017 年度

慶應義塾大学体育研究所基盤研究シンポジウム
「オリンピック教育とスポーツボランティア～
東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」報告書

2018年4月25日発行

編集・発行 慶應義塾大学体育研究所

代表者 石手 靖

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

<http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/>

制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 株式会社太平印刷社